どがあげられた．また，2例のみであるが骨折も認められ，骨軟化症の存在が示唆された．

18. 副甲状腺シンチにおけるタリウムの下顎集積例の検討

河辺 譲治　小田 淳郎　岡村 光英
牛嶋 陽　小橋 肇子　澤 久
波多 信　下西 祥祐　池田 穂積
小野山靖人（大阪市大・放）
越智 宏暢（同・核）

慢性腎不全透析患者の二次性副甲状腺機能亢進症例(2HPT)に対して日常行っている副甲状腺シンチのTl像で，下顎にびまん性に高集積を呈する例を経験した．同時に行ったTcO_4^-像では，全例同部への集積は見られず同時期の骨シンチでは，下顎骨に高集積を呈する例を多く見た．今回，下顎に高集積を呈したTlシンチ像を，骨シンチ像と比較検討した．対象は，Tlシンチで下顎部に高集積を呈した2HPT，21例．年齢は，27歳から62歳，平均46.7歳．男性9例，女性12例．透析期間は，7.1年から16年，平均12.1年であった．方法は，対象の21例について同時期に行った骨シンチで下顎骨への集積を集積度に応じて2+，1+，0，と分類した．すなわち，下顎骨全体に強い集積を呈しているものを2+，犬歯部に強い集積を呈し下顎骨も全体に淡く集積しているものを1+とした．下顎骨への異常集積が見られないものを0とした．結果，Tlで下顎に高集積を呈した21例中，骨シンチの下顎集積2+は19例，1+は1例，0は1例，であった．つまり，Tlシンチで下顎に高集積を呈する例は骨シンチでも下顎骨に高集積を呈する例が多く，Tlシンチの下顎部集積は下顎骨に集積したと考えられた．文献的には，Tlが下顎骨にびまん性に集積するという報告は見られなかった．Tlの下顎骨への集積機序については，動物実験でTlの骨への親和性を示唆する報告がありTlの骨への親和性も関与していると考えられた．しかし，骨シンチで下顎骨に高集積してもTlシンチで下顎部集積を呈さないものもあり，機序は不明であった．

19. 原発性胆汁性肝硬変および肝硬変患者腰椎骨塩量の経年的変化 ——Dual photon absorptiometryによる検討——

正木 恭子　塩見 進　高嶋 祐子
城村 尚登　植田 正　池岡 直子
黒木 哲夫　小林 絢三（大阪市大・三内）
小橋 肇子　岡村 光英　越智 宏暢
（同・核）

原発性胆汁性肝硬変(PBC)では，しばしば骨病変を合併することが以前より知られている．今回，われわれはDual photon absorptiometry (DPA)診断装置を用いて，PBCおよび肝硬変患者の骨塩量を測定した．さらに，一部症例において経時的に検査を行い，骨塩量の経年的変化も検討した．対象は女性のPBC 31例，肝硬変48例であり，DPA診断装置としてNorland社製Dichromatic bone densitometer model 2600を用いた．骨粗鬆症を最もよく反映する第3腰椎の骨塩量を測定し，Bone mineral density (BMD)を測定し，骨塩量の変化はBone mineral content (BMC)を経時的に測定した．

肝硬変のBMD値平均は，40歳代1.04 g/cm^2，50歳代0.911，60歳代0.774であり，健常例に比べて50歳代までは有意差を認めないが，60歳代で生理的な骨塩量低下以上に低下する傾向を認めた．PBCでは30歳代1.09，40歳代1.043，50歳代0.854，60歳代0.618であり，50歳代で健常例に比べ，60歳代で健常例，肝硬変に比べて低値であった．さらにPBC 8例，肝硬変12例において経時的に第2，3，4腰椎のBMCを測定した．PBCの観察期間は8～30か月(平均15.9か月)，肝硬変は8～24か月(平均14.2か月)であった．年平均変化率は肝硬変は−3.7%，PBCは−5.6%であり，いずれも健常例の年平均変化率より低い値であり，PBCは肝硬変に比べてより顕著な低下率であった．

Presented by Medical*Online